

水俣学へ向けて

～水俣病事件におけるライフヒストリー研究の再評価

萩 原 修 子

「水俣病は鏡である。この鏡は、みる人によって深くも、浅くも、平板にも立体的にもみえる。そこに、社会のしくみや政治のありよう、そしてみずからの生きざままで、あらゆるものが残酷なまでに映しだされてしまう。そのことは、それを見た人たちにとっては強烈な衝撃となり、忘れ得ないものとなる。」（原田正純『水俣が映す世界』日本評論社1989：3-4）

1. はじめに

本学を中心に構想されている「水俣学」は「水俣病」をめぐる諸問題にそれぞれの研究分野から総合的に研究をすすめていくことを目指されている。私は、このプロジェクトに参加するに際して、実はかなりのとまどいがあった。私の場合、文化人類学という分野からのアプローチとなるのだが、この学問分野から「水俣病事件」をはたして、どのように取り扱うべきなのか。研究対象や研究方法の問題である⁽¹⁾。

私に関心をもっていたのは、水俣病事件の社会運動としての側面である。開発や進歩が至上命題となった近代という「大きな物語」⁽²⁾となって、高度経済成長を遂げたのち、公害闘争や平和運動などの「新しい社会運動」が顕在化してきた。反公害運動の象徴的事件である水俣病事件も、この新しい社会運動の一つであると考えられる。私の問題関心は、こうした近代化の過程において、人々の社会への関与や生活への関心、人間関係の作り方などの個々の生活の形は、いかなる変化を遂げてきたか、さらに、それは日本の後期資本主義時代のいかなる変化を意味しているかということである。これらの問

いは、社会学などの隣接学問と共有するものであるが⁽³⁾、どのような形でアプローチすることが、人類学として妥当なのか。人類学の方法としての主要アイデンティティは、1920年代以降からフィールドワークによるところが大きかった。しかし、以下で詳述するが、今日、このフィールドワークにも多くの問題や危機が生じている。その方法論にも疑義がなされている現在、人類学的研究という際に、どのような方法と視点をもつべきか。

そもそも、こうしたアプローチの問題を疑義すること自体に意義があるのか否かも問われるべきかもしれない。しかし、ことに「水俣学」という新しい学問の構想にあたっていることが私を逡巡させたのである。自分自身、未熟ながらも属する学問領域において、どのような形でそれに寄与できるか、これは考察するに足るものだと思われる。言い訳めいているが、こうした逡巡の中で、水俣病事件についての文化人類学的研究としての成果はいまだ出せていない。本稿では、当該学問からのアプローチの問題そのものを取り扱うことに焦点をあてている。その意味で、「水俣病事件についての文化人類学的研究」の前段階にとどまった議論となっているが、こうした議論こそが、これからの水俣病の研究の議論の土台となるのではないかと思いつたのである⁽⁴⁾。

本稿において目指すところは二つある。一つは、水俣病事件への多くの人々によるさまざまなアプローチの成果から、当該学問のフィールドワークという方法論の見直しを行なうことである。具体的にいうと、水俣病事件に対峙した多くの研究者や運動家、表現者や患者たちによって記述された作品（出版物）を通観することで、フィールドワークと民族誌の問題を再考する。もう一つは、構想されている「水俣学」の可能性について、文化人類学の分野から考察できることをいくつか提起することである。

2. フィールドワークと民族誌

(1) 方法としてのフィールドワークと成果としての民族誌

人類学とはそもそも何か。ここでは概説的な入門書にしたがって、まとめ

てみよう。「文化人類学はわれわれとは異なったロジックにしたがって生きている「他者」を理解することを通じて、われわれ自身についてよりよく知ることをめざしている。」(菅原1991:18)もちろん、いろいろな定義があるが、このように異文化研究をとおして、それを鏡として自文化を見直すことと捉えておく。

方法としての現地調査がはじまったのは、1920年代からである。いわゆるフィールドワークは、直接現地の人びとから話を聞くこと（インタビュー）と、現地の様子を観察することを軸にはいるが、できれば現地に住みこみ、現地の人と同じように生活して、その催事などにも参加して、生活を体験することが期待されている。これを参加（または参与）観察（パーティシパント・オブザベーション）という。これらの研究成果はふつう「民族誌 ethnography」という形式で世に問われる。フィールドワークはいわば、「民族誌」を書くために材料を集めに調査地に行っているようなものといえる。その結果、研究者は研究対象としたある民族あるいはある地方については、だれよりもよく知っていて、しかも体系的に把握している人になる。(米山1991:9-12)

このフィールドワークの方法を確立したのは、マリノフスキー(Malinowski, B. 1884-1942)である。彼のトロブリアンド諸島でののべ25ヶ月の滞在からフィールドワークという方法が生まれた。マリノフスキーがあげるフィールドワークの方法の条件は次の3つである。「第一に、研究者が真の科学的目的をもち、近代民族誌学の価値と規準を知らなければならない。第二に、仕事のためによい環境に身をおくべきである。すなわち白人と離れて、現地人の中で生活すること…最後に、証拠を集め、操作し、決定するためにたくさん専門的方法を用いなければならない。」(Malinowski 1984[1922]:6)というものである。物見遊山ではなく、異邦人として孤独な環境に身を置き、諸学問の方法論を利用してデータを理解することが述べられている。

さらに、フィールドワークに必要な技術とは何か。松田によって以下のよう

に的確にまとめられる。1. 長期の滞在（文化人類学者になろうとする人

びとは、たいてい1～2年のフィールドワークを行うように指導される)、2. 言語の習得。3. 現地の人びととの間の信頼関係(ラポール)。4. 現地社会の一員として受け入れられるということである。このようにして、フィールドワーカーは、自分の五感のすべてを使用して対象にアプローチするのが望ましいとされる。(松田1991: 36-39)

しかし、フィールドワークにもさまざまな懐疑が投げかけられることになる。それまでは、こうした未知の領域でフィールドワークによって調査した報告を民族誌として記述することが、なにがしかの研究成果として評価されてきた。しかし、現在のように情報化・グローバル化が進み、世界中で未知の領域がなくなり、また、かつて人類学者が抱いていたような完結した小世界などは存在せず(記述されてきた民族誌はそれだけで完結した小世界のように書かれてきた)、いずれも他の世界との関わりから切り離すことなどできないことがわかってくると、人類学の研究対象の前提が懐疑にさらされたのである。こうした「未開社会」という前提だったからこそ、人類学者は「万能のスーパーマン」のように異文化を理解した。しかし、人類学者は、現地の人びとが紡ぐ豊かな<生>を自分の<業績>に切りちぢめ、彼らのいないところで彼らを<代弁>するムシのいいやつにすぎなかったのではないかという懐疑。つまり、異文化を語る権利、民族誌を書く権威についての懐疑である。また、インフォーマントと人類学者の関係性から紡がれる語りを、直接その文化、社会全体の客観的な「構造」や「体系」と捉えたり、インフォーマントから得られた矛盾に満ちた語りも整合的に美しく体系化する魔法を使っていたのではないか。さらに、人類学者が異文化を捉える際の枠組みが、サイードの『オリエンタリズム』で示されるように西洋の投影図ではないかという懐疑である⁽⁵⁾。こうした懐疑の根底にあるのは、未開社会の彼ら／文明社会の我々という二分法であり、人類学が植民地主義と深くかかわってきた歴史を物語っている。

こうして、調査者／被調査者の非対称的な関係性のもとに、無自覚に書かれてきたこれまでの古典的な民族誌が徹底的に批判にさらされることになっ

た。こうして人類学的方法や対象そのものも変革を迫られることになった⁽⁶⁾。

文化人類学がその根本において民族誌を書くことを主眼としてきたとすれば、その民族誌をいかにして書くべきかという問いは学問の基盤にかかわる問いである。私が本稿で再考したいのは、上記の問題をはらんだフィールドワークと民族誌についてである。五感をつかったフィールドワークは、まさになにも人類学にかぎらず、これまで半世紀ものあいだに水俣に出会った多くの人々（研究者やそうでない人々）も行ってきた。その成果が、それぞれの分野での研究成果であり、芸術家（表現者）の作品であり、支援者の数々の実践である。そして、人類学であれば、それが民族誌になるのである。人類学者が異文化の強い衝撃に打たれて、その文化を理解するためにフィールドワークを行い、その世界を記述した民族誌を作成することを仕事とするならば、水俣ももちろん強力なフィールドである。そして、実に、これまで数多くの人々がこの衝撃に打たれ、たじろぎ、巻き込まれてきた。その成果がさまざまな形となってあらわれている。それはもっぱら五感をつかったフィールドワークによる聞き取りによってなされるのだが、それと類似した活動によって書かれた書物、とくに、私が注目したいのは聞き書きである。それというのも、聞き書きの多くの書物が、人類学のフィールド調査の聞き取りと重なりあい、とくに、そこで紡ぎ出される自らの生についての語りは個々人のライフヒストリーを対象とする「個人中心的民族誌」ともいうことができる。さらに、これらは、語り手と聞き手の関係性が多様に築かれているため、上述の人類学の諸問題に何らかの示唆を与えてくれるだろう。

こうした視点から、私は、個人中心的民族誌の再評価からフィールドワークと民族誌の問題を考察したい。まず、個人中心的民族誌の人類学における位置と諸問題について概観しよう。

(2) 「個人中心的民族誌」ライフヒストリー調査の意義

個人中心的民族誌の主要な方法は、ライフヒストリー調査である（米山1993：219）。ライフヒストリーlife history という用語は、日本の場合、社会

学者の中野卓以降は「生活史」と訳されている。個人の歴史を生活史と呼ぶが、単に生活史というと、消費生活の一般的な生活のあり方の歴史と思われるが、間違いがちなのでライフヒストリーとカタカナで表記している。これには個人の生活に焦点をあてた個人のライフヒストリー（個人生活史）としてと、その生を包含する社会的文化的事象をデータとする場合（社会生活史）の二つがあるという⁽⁷⁾。

私は、人類学におけるフィールド調査において聞き取りできるさまざまな言説、語りをも、ライフヒストリーの断片としてとらえたい。それぞれの言説がイデオロギー効果をもち、その中に個々人と世界との関係の諸様式が表出されていると考えれば、ライフヒストリーという用語で限定せずとも、人々の語り、言説は、個々人が世界をどのように認識するか、個々人の生と世界との関係があらわされているからである⁽⁸⁾。ライフヒストリーはそれがあある形態で統合された形として表出されるものだと考えられるからである。したがって、個人的な心理的内面と、その生を育んだ文化的社会的事象についてのデータという見方でライフヒストリーあるいは語りの価値を捉えるのではなく、それらを兼ね備え、個々人の世界への関係する様式を表出したものとして捉えられる。

上記の語り、言説を含んだ意味としてライフヒストリー調査を確認した上で、類義語・同義語である自叙伝、伝記との関係はどうだろうか。自叙伝と伝記の違いは明白である。自叙伝は自分自身による人生のレポートであり、伝記は執筆者と対象者が別である。しかしながら、人類学においてライフヒストリーを採集するさいには、そう簡単に区別できない。記述する者／記述される者の関係性がどのようなものであり、それが結果としてどう表出されているかが問題なのだ。民族誌となってあらわれたものの中には明瞭にその区別ができないのである。本来、その二者の「繊細で複雑な共同制作の試み」（ラングネス82）である意味において、出版された伝記や自叙伝においても「聞き書き」であつたら同様のことがいえる。この聞き書きにおける記述する者／される者、あるいは、聞き手／語り手、調査者／被調査者の問題が、民族

誌をどう書くかという前述の問題とつながっていくのである。

ここで、人類学におけるライフヒストリーの位置付けを見てみよう。そもそも、社会学、人類学にしても、人類の諸文化、諸社会を対象とする学問の場合、その文化や社会にアプローチするさいには、どうしても個々人を超えたある社会、構造、体系といった概念への関心が優先され、個々人への関心は相対的に弱められてきた⁽⁹⁾。

フィールドワークによる聞き取りの対象は、「部族社会」のような民族集団、閉じられた一地域の集団であった。インフォーマントはその集団の代表として、記述されたのである。ところが、社会の近代化、都市化、価値観の多様化など、ある地域社会、ある民族集団を数人の代表者の聞き取りによって捉えることができなくなったことや、いわゆるコミュニティが消失して多様な集団に分解してしまっていることから、対象を個人に絞り、それを取り巻く社会を見るという手法がライフヒストリー研究として注目されるようになったのである⁽¹⁰⁾。

こうしたライフヒストリー調査は、構造や体系という社会・文化の全体への関心に終始していた人類学の方法論を批判する上で価値がある。とはいえ、個々人の生を照射したからといって、社会や文化のどのような点が明らかになるかという根本的な問いに、明らかな答えはいまだ用意されていない。さらに、ライフヒストリーといえども、それを最終的に記述するのは人類学者にゆだねられていることから、民族誌の記述における人類学の根本的な問題を解決しはしない。つまり、そのライフヒストリーを調査し、多くを採集したとしても、それを記述し、編集するのは人類学者であれば、調査者と被調査者の非対称的な関係性の構図は同様である。

この問題に正面から取り組んだのは、クラパンザーノの『精霊と結婚した男—モロッコ人トゥハーミの肖像』(1980 (1991)) での実験的な試みである。調査者が対象にたいしてその記憶の整合性をはかるために、何度も質問を重ねていくと、そのつど異なった記憶が語られる。それは、編年体的に記憶し、語る西欧流のやり方とは異なった自己の生への認識があることを示してい

る。そして、そのような対象とからみ合う調査者の姿を克明に示して、これまでは隠ぺいされがちだった調査者（聞き手、編者）との共同作業によって一連のライフストーリーが紡がれていることを示した。このように、クラパンザーノが問題にしているのは、民族誌的出会いであり、調査者（民族誌家）にとって民族誌を書くということは、他者理解を通して自己発見としての自己構成の行為であり、同時にまた、その世界の記述でもあると理解されている⁽¹¹⁾。

これは、明瞭に区分されていたはずの民族誌における自己と他者（我々／彼ら）の二分法の自明性を危機にさらすことになる。こうして、保持されていたはずの客観性は、その土台の脆弱さを暴露することになったのである。

それでは、ライフヒストリー研究として、どのような方法が望ましいのだろうか。松田が提起するのは、対象の文化において、人類学者自身の自己（セルフ）や生（ライフ）の投企することである。人類学者自身のセルフを投企して、対象のセルフと向き合って、共通の理解の場を構築していくこと。人類学者が対象から聞き取り、編集し、書くという作業ののちに示されるライフヒストリーは、非対称的な関係性のままである。しかし、その一連の作業において人類学者である私のセルフと被調査者である彼のセルフが向き合い、ともにセルフを創造していくとすれば、セルフの創造性という点において、両者は同じ土俵に立つことができる。だからこそ、二つのセルフの間で共感や共鳴が生まれる。これからの人類学は、自己のセルフを投企して、他者のセルフやライフと向き合うことによって、他者と存在論的に格闘していくことが必要だとする。人類学がこうした、セルフやライフを軽視してきた結果、目指されるべき「理解」から離れたものにしか到達できなかったではないか（松田1995）。

これは、ラングネスの以下の指摘にも通じる。「最良のライフヒストリーの研究でなされる共同作業は、それを「交渉」「出会い」「相互行為」あるいは「交換」とよぼうと、インフォーマント、調査者、そして読者にとって変革的な経験でありうるだろう。」（ラングネス8）これが、水俣における聞き書き

の出版物へと私を注目させたのである。

3. 水俣病事件における「フィールドワーク」とその作品

(1) ライフヒストリーとしての作品群の通観

これまで水俣に関する聞き書き、ライフヒストリーを含めて出版された文献資料は実は多数ある⁽¹²⁾。私がここで扱う文献は、次のような意味においてである。通常は、聞き書きにおける語り手のライフヒストリーが描かれるのが常であるが、のちに触れるように、水俣では個々人の生の聞き書きを通して聞き手自身のライフヒストリーがあわせて描かれる作品が少なくない。そこで、聞き書きを中心に、その語り手／聞き手(あるいは調査者／被調査者)の関係性によって、次のように分類したい。

まず、その作品に表出されるライフヒストリーは、聞き手／語り手、あるいは調査者／被調査者、のいずれの比重が高いか。1. 聞き手あるいは調査者のライフヒストリーの比重が高いもの、2. 語り手あるいは被調査者のライフヒストリーの比重が高いもの、さらに、2の中でも、調査者あるいは聞き手のバイアスがどの程度表出されているかによって、サブカテゴリーに分類される。2-1. バイアスの表出が多いもの、2-2. 少ないもの。一般に「聞き書き」といわれるものは、このカテゴリーであろう。その他に、3. 講演会、座談会などの記録という形で一定の目的にそってそれぞれのライフヒストリーを再構成するもの。他には、4. 調査者／被調査者、聞き手／語り手がともに同一人物である自叙伝の形態。さらに、5. 聞き書きをフィクション形式にした文学など、1～4におさまらない聞き書きをもとにした作品群である。

以下、それぞれの分類にしたがって、いくつか具体的な作品を例にとりたい。

1：土本典明『水俣＝語りつぎ 2 水俣映画遍歴 記録なければ事実なし』

1988、原田正純『水俣＝語りつぎ 4 水俣・もう一つのカルテ』1989

- 2-1: 角田豊子「天草の女」『水俣の啓示 下巻』1983、羽賀しげ子『水俣＝語りつぎ 1 不知火記 海辺の聞き書』1985、藤田寿子／芥川仁『水俣海の樹』1992
- 2-2: 岡本達明「天草漁民間書」『近代民衆の記録 7 漁民』1988、岡本達明・松崎次男編『聞書水俣民衆史 1～5』1989-1990、木野茂・山中由紀『水俣まんだら 聞書・不知火海を離れた水俣病患者』1996、木野茂・山中由紀『新・水俣まんだら チッソ水俣病関西訴訟の患者たち』2001、緒方正人語り／辻信一構成『常世の舟を漕ぎて：水俣病私史』1996、水俣病患者連合編『魚湧く海』1998、栗原彬編『証言 水俣病』2000
- 3: 協力／環境創造みなまた委員会『みなまた 対立からもうい直しへ』【平成7年3月】、環境創造みなまた実行委員会編『再生する水俣』1995、「私にとっての水俣病」編集委員会編『水俣市民は水俣病にどう向き合ったか』（2000年）
- 4: 徳臣晴比古『水俣病日記 水俣の謎解きに携わった研究者の記録から』1998、御手洗鯛右『命限りある日まで』2000
- 5: 石牟礼道子『苦海浄土』1969、三島昭男『哭け、不知火の海』1977、色川大吉編『水俣の啓示 上下』所収の論文1983、宮本憲一編『水俣レクイエム』1994、岩瀬政夫『水俣巡礼 青春グラフィティ'70～72』1999、松本勉・上村好男・中村孝矩編、『水俣病患者とともに 日吉フミコ闘いの記録』2001

上記の分類は、調査者／被調査者あるいは聞き手／語り手の関係性を考察する上での便宜的な分類である。そのため、分類がすべてを網羅したものではないし、分類に応じた各作品の明瞭な線引きも難しい。ここでは、分類枠組を提示しやすい作品を取り上げて、特記すべき点を挙げていく。

(2) 具体例

1 調査者あるいは聞き手のライフヒストリーの比重が高い作品

土本典明の『水俣＝語りつぎ 2 水俣映画遍歴 記録なければ事実なし』（1988年）は、長年、水俣において記録映画を取り続けている著者の映画制作時の状況や当時の様子、自分への問い直しを年代別・映画ごとに語っている。なぜ記録映画をとり続けるのか、この問いは、なぜ研究者が水俣を研究するのか、支援者が運動をするのか、文学者が、画家が水俣を表現するのかという問いとともに、発せられている。水俣をめぐる表現者としての自分を、水俣と対峙するさまざまな人々とともに問い続けていることが、水俣に投射された土田氏自身の半生となってこの作品に語られている。「私は水俣の地ごろではなく、映画のプロパーのよそ者である。漁民とは無縁に生きた人間であり、都市生活者として、村にあったような共同体的共鳴板はもっていない。その私がどう写した相手との関係に責任をもつべきか。あれこれ思案しても所詮、そのかわりを私の側から守り続け、その人の生活をみつめつづけ、ともに難儀を分かちあうことしかないのである。」（土本1988：291）「こうして患者の全人的な領域に立ち入るとき、私は映画の中で犯すことから始まったプライバシーを更に極限までつまびらかにしていく自分に気づく。…私はそこでただつき合いつづけるから許してほしいというほかはない。おそらくすべてを許されることは決してなく、一生その関係をまるごと背負うことしかないであろう。だが映画で記録することをしごととして決めた私にはこれしかなく、喜びも辛さも渾然たるなかでころげてゆくしかほかはない。」（土本1988：301）

原田正純『水俣＝語りつぎ 4 水俣・もう一つのカルテ』（1989年）も医者として水俣と対峙する自己の半生が語られている。自らのライフヒストリーと水俣における人々のライフヒストリーが見事に融合され、読者をその重なりあう多様な生の織物に引き込んでいく作品である。当時の文化的社会的背景も確かな筆致で織り込まれ、近代社会・文化に対する医学者としての問い直しには「水俣学」提唱の根本的姿勢が既に提示されている。「水俣病事件の膨大さは底なし沼のようにさまざまな材料をつぎつぎと提供する。どんなに熟知しているように想っても、現地に行き、じかに話を聞くと必ず新しい発

見を何か一つはする。膨大なドラマの片鱗を垣間みることができる。考えてみればそれはあたり前で、この不知火海は半世紀の汚染の歴史があり二十余万の人生の歴史があるわけである。」(原田1989:269)「いかにも古めかしい“怨”ののぼりを立てた被害民が近代史の中で未曾有の闘いをやってのけたのであり、法学・医学その他の諸学問が情念に根本から問い直されている。今日の絶望的な現代社会の混沌とした淵から這い上がるエネルギーは、このような未分化ともいえる原人間のうちから出てくるのかもしれない。…民衆の「語りことば」の中には病の大的メカニズムから小のメカニズム、症候学から治療そして予防に至る多くの貴重な事実が存在している。未曾有の広範な環境汚染による中毒という公害の研究の中で客観的、科学的と呼び慣らされてきたものは一体何であったか問われている。…冷えきった科学に生き生きとした生命を甦らせることができるのは民衆の知恵であると考えるのは私だけだろうか。」(原田1989:255-256)原田氏のこの姿勢は他の多くの著書にも一貫している。

2-1 調査者あるいは聞き手によって被調査者あるいは語り手のライフヒストリーが描かれているが、聞き手の存在が表出している度合いが高い作品。

角田豊子(不知火海調査団のメンバー)の「天草の女」(1983年)は、5年におよぶ聞ききによって、天草において水俣病に苦しむ老女のライフヒストリーを記述している。老女の語りを方言のまま挿入しているが、全編は角田氏自身の目で再構成されており、ドキュメンタリー風小説のようである。読者には角田氏という女性の目をとおして見た一人の老女のライフヒストリーであることがはっきりと示されている。他の作品として、2-2に近いが、やはり不知火海総合学術調査団に参加した羽賀しげ子の『水俣＝語りつぎ1 不知火記 海辺の聞き書』(1985年)がある。これは、個々人の居住する風土、略歴、自分との出会いについて文学的に述べられたあとで、方言のままの聞き書きで構成されている。説明と聞き書きそのもののバランスがほどよく、読者

を羽賀氏のスタンスに可能なかぎり同化させていく語り口である。当時の民族誌的資料としての価値も高い。水俣の聞き書きを扱う緊張感や真摯さが伝わってくる。「テープレコーダーに頼ってみても、…どうにもなりません。読み物とするには、聞いた話を、かなり整理し、構成する必要があるからです。土地の人が読まれたなら、おかしいぞ、と思われる箇所が相当あると思います。そうかといって忠実に言葉をおこせばそれで良いのか、というところでもなお不十分でしょう。そうした言葉の不安やら、何より水俣病という重大なテーマの持つ怖さを知りつつ、足を踏み出してしまったのは、やはり、海辺の人々の深い精神-水俣では魂、とごく自然に言いますーに魅せられたためで、その辺りを感じていただければと思います。」(羽賀1985:272)藤田寿子『水俣海の樹』(1992年)は、支援者として水俣の地にやってきた著者が活動を通して出会った患者たちの生を描きながら、自らの生を併せて叙述している作品である。

2-2 被調査者あるいは語り手のライフヒストリーが描かれる中で、調査者あるいは聞き手の存在が相対的に表出していない作品。

調査者あるいは聞き手が限りなく表出されていない作品は、岡本氏の作品である。岡本達明と松崎次夫編著の『聞き書水俣民衆史 1～5』(1989-1990年)は、自身の語り手への違和感や共感といった関係性をその記述のなかに含めていない点、2-1とはまったく異なる。とくに方法論についての意識はきわめて確固としたものなので、人類学の民族誌記述においても再考を促させる。のちほどあらためて扱う。

木野茂・山中由紀『水俣まんだら 聞き書・不知火海を離れた水俣病患者』(1996年)はタイトルのとおり、主に関西に移った水俣病患者の関西訴訟にいたる経緯の語りである。どのような状況で語りが収集されたかわからなかったが、近著の『新・水俣まんだら チッソ水俣病関西訴訟の患者たち』(2001年)では、前著の内容を含めながら訴訟や運動のその後の進展を加えて、著者らがこの聞き書きを編むにいたる経緯があとがきで詳しく記述されている。

若い世代の山中氏が何ゆえこうした書物を編むにいたったのかは興味深いところである。「患者、支援者、研究者、医師など、水俣病は生きた化石・歩く標本の宝庫だった。例えて言えば、義経や弁慶が生きて歩いているようなものである。しかし、そのことに気が付いたのは、下田さんが亡くなる直前の、下田さん自身の言葉によってだった。…私が学んだことは、世間の冷たさと温かさ。そして、正義の実現には数年ではなく数十年、もしかしたら数百年単位の年月がかかるのだから、焦らず、諦めず、出来るだけのことを、後世に恥じることがないように、とにかく静かに続けていくことの大切さ、仲間大切さである。現実の苛酷さに圧倒され、未来に絶望し、プツンしそうになっている人達に本書が渡れば、望外の幸せである。」（あとがき371-372）木野氏は、後輩の遺志を受け継ぐ形で水俣病と関わることになり、大阪市立大で自主講座を開講。「当初から自主講座のスタンスは、単なる（関西訴訟）支援にとどまることなく、そこから何かを学び、自分自身の生き方に生かすことであったが、その意味では水俣病事件はまさに汲めども尽きぬ宝の泉であった。しかし、それ以上に大きな発見は、患者さんたちの人生そのものが私たちに未来への希望と勇気を与えてくれる「まんだら」のごとき存在であることだった。」（あとがき373）患者の数人のライフヒストリーを丁寧、その語りを織りまぜながら、解説を適宜加え、関西訴訟にいたった経緯を編年体式にまとめている。読者もその経緯に思わず引き込まれていく。

緒方正人語り／辻信一構成『常世の舟を漕ぎて：水俣病私史』（1996年）は、人類学者の辻氏が緒方氏の語りを構成している。双方の信頼関係が伝わってくる作品である。内容的に自らの水俣病を通した半生を振り返った深い哲学的考察に満ちており、近代社会への批判ともなっている。約1年にわたる聞き取りによって構成されたものである。

水俣病患者連合編『魚湧く海』（1998年）は、「海と山に生きた人々」として16名への聞き書きと座談会の模様が綴られ、水俣病患者連合の軌跡として編まれている。語りは方言のままで、語り手の居住地とその生い立ちについて説明が付される以外、解説や説明はない。聞き手の名前がそれぞれに文末

に記されるのみで、聞き手と語り手の関係は、あとがきにごく簡単に述べられている。会長のことばによると、会の発足からすでに23年の月日が過ぎており、応援していただいた方々へのお礼と、これまでの運動における思い出を残そうという意図であるとおり、「記念誌」である。その名の通り、それぞれの患者の写真を掲載されて、詳細なライフヒストリーというより、個々人の人生の横顔の記載というスタイルである。事務局長は「ぼくらは一番魅力を感じていたのはその運動の正義ではなく、運動に関わっておられる一人一人の患者さんであったことに気付かされたのだ。」(あとがき343)、「運動の当事者として体験した事実を記すべきだし、残したいと想った。被害者の運動といえども美しいだけのモノではない。本当は運動も生活の一部でしかなく、だからこその悩みもあり楽しさも生まれる。そのことも伝えなかった。できるだけ肉声で語りたい。それでいて独り善がりにならないように普遍性ももたせたい。」(弘津敏男、編集後記)

さまざまな人の語りを「証言」として編む著作もある。栗原彬編『証言 水俣病』(2000年)は、1996年に「水俣・東京展」での水俣病患者による全公演を採録し、その後に再度話を聞いて、補足、構成したものであるという。聞き手はそれぞれいるが、聞き手の語りは石牟礼氏以外、紙面の都合で割愛されている。話しことばのまま収録されて、臨場感がつたわる上に、再構成されているために、語り全体で話者のライフヒストリーがある程度理解できるようになっている。「生きている言葉に「解説」は不要である。私は、この本に収められた語りが、それによって触発され、同時に異義申し立てしている社会的・政治的文脈、なかなづく埋立地の風景を構成するシステムの政治を素描しようと思う。願わくは、語りの意味が自ずと浮かび上がるように。ついで発語の水俣病への内在的な視角が、記憶の海の風景の再生に連動していることに触れたい。」(栗原2000: 4)「水俣病の世界はすぐれて近代という地平の延長上に展開される、現代日本の政治システムと人間存在とが拮抗する、重層的なドラマとして捉えられるだろう。」(栗原2000: 8)講演会の記録という形態ではあるが、水俣病についての社会文化的政治的な多層にわたる問

題が掘り下げられている点で、3ではなく、こちらに分類した。

3 講演会、座談会などの記録のように、ある目的に沿って構成者されている作品。

行政側によって主催された「水俣の再生を考える市民の集い」の記録である。環境創造みなまた実行委員会編『再生する水俣』（1995年）。これは、患者やその他水俣病をめぐる人々がようやく水俣病について話しだしたその内容が記述されている。方言は方言のまま、臨場感はあふれている。協力／環境創造みなまた委員会『みなまた 対立からもやい直しへ』は、平成7年3月に行われた座談会をもとに構成されている。座談会の出席者は患者、市役所職員、研究者など多数。その中で、自らのライフヒストリーの断片が記載されている。「私にとっての水俣病」編集委員会編『水俣市民は水俣病にどう向き合ったか』（2000年）は、「もやい直し」をスローガンとする「環境創造みなまた推進事業」の一環として、水俣市が主催で水俣病資料館、水俣病被害者の会、水俣病センター相思社、国立水俣病総合研究センターが協力する形で始まった。最後に編集後記として編集に携わったそれぞれの人々によって感想が書かれている。「深い溝」を痛感したり、新たな現実を知ることになったり、「水俣の新しい出発」を実感したりである。相思社の吉永利夫氏は「本書もまた「全貌をあきらかにすること」に連なっているはずである。しかし20数年前に水俣での暮らしを始め、多くの市民の人々を「患者家族に対する加害者」として見つめてきた私にとって、本書のための聞き取り作業は、少々違和感を伴うものでもあった。「実は被害者でもあった人々」に語っていただいた本書による「水俣病物語」は、水俣の新しい出発であるように思えるし、私にまた新しい視点と取り組みを求めているようにも思える。」（私にとって…2000：227）これは、吉永氏の率直な感想であろう。聞き取りによって、対象と出会い、それを構成していくことにおいて、新しい自己の変革につながっていることはこれらの述懐からみても理解できる。「今回、多くの市民からそれぞれの立場による水俣病問題への様々な思いや、長くこのまちで暮らして

きたことから見えてきた大事なことなどについて、遠慮のないお話を聞かせていただくことができました。本書編集委員 8 人による市民各層合わせて 29 人から 22 回にわたる聞き取りは、平成 10 年 1 月から翌年 7 月まで続けられ、時には 2 度、3 度に及ぶこともありました。テープ起こしの後も記憶や事実の確認作業を続け、重複を点検し、編集したものが本書です。」（私にとって 2000：5-6）「私達はこの数年の間に徐々に進んでいる「市民間のもやい」や「被害者と市民のもやい直し」に自信を持っています。だからこそ今回のような率直な意見をあえて市民の間に明らかにすることができました。本書に対し多くのご意見をお寄せいただくことをお待ちしております。お互いの思いを遠慮なく語り合い、ぶつけ合いながら、どのように「もやい」あるいは「もやい直し」が可能なのかを考え、具体的な取り組み方法のヒントとしたいと思います。」（私にとって 2000：7）なかには「にせ患者発言」に通じる語りも見受けられるが、それも偽らざる市民の思いとして掲載しているところに、上記の出版の本意が見られる。語りは固有名で掲載され、簡単な略歴が最初に附されている。

4 自叙伝 聞き手と語り手で同一人物

徳臣晴比古『水俣病日記 水俣の謎解きに携わった研究者の記録から』（1998年）は、熊大の医学者として認定審査会の会長も務めた著者が、水俣病にたずさわってきたさいの自らの日記をもとに回想している自叙伝である。自叙伝ではあるものの、内容的には「私は私の日記と内外の文献、研究記録、私どもが実際にタッチした経験などを基に医学研究からみた水俣病を後世に書き残しておきたいと考えている。」（徳臣1998：2）とあるように、全編から科学としての医学への情熱が伝わってくる。淡々とした筆致で水俣病と格闘してきた経緯をつづっている。御手洗鯛右『命限りあるまで』（2000年）は、水俣病の障害と闘った半生をつづる自伝である。

5 その他

石牟礼道子の『苦海浄土』(1969年)は、ライフヒストリーではないが、小説という形態で水俣病事件の渦中にある個々の生をとりあつかった最初の作品である。この作品に打たれて、水俣を訪れた人々は数知れない。また、石牟礼道子氏自身に強烈な衝撃を受けた人々も多い。朝日新聞記者として飛騨高山で水の公害運動をしていた三島昭男氏は『哭け、不知火の海』(1977年)によって、石牟礼道子を主人公にした水俣病事件のドキュメンタリーをものしている。また、その著作について書かれたものに、新井豊美『苦海浄土の世界』(1986年)がある。詩人である著者は、石牟礼道子氏の描く詩的言語世界の読解を試みている。「石牟礼道子の作品は批評しようがないという声を聞くのは、水俣病患者と作者である石牟礼が像とその影のように一致した印象を生むのであり、彼女自身が患者の化身であるかのような絶対性を帯びるからである。」(新井1986:165抜粋)土本氏は、自らの水俣への関わりと比べて「(石牟礼道子の文学は:注・萩原)映画の表現世界とまったくちがう世界であり、とても映画化できる原作ではない。また決定的に氏と私をへだつものは石牟礼氏が不知火の地ごろの女性であることだ。渡辺氏(作家の渡辺京二:注・萩原)は、「…このような世界、いわば近代以前の自然と意識が統一された世界は石牟礼氏が作家として外からのぞきこんだ世界ではなく、彼女自身、生まれた時から属している世界、いいかえれば彼女の存在そのものであった」とのべ、…彼女は彼ら(漁民)に成り変わることが出来る…」(土本1988:286)ここで引用したのは、文学特有という前提であるが、書く主体が対象(漁民)そのものと一体化しているという指摘である。調査者／被調査者の間を隔てる壁が楽々と超えられている作品である。

次に、ここで取り上げることに多少違和感があるかもしれないが、岩瀬政夫『水俣巡礼 青春グラフィティ'70~72』(1999年)も、水俣との出会いによって自らのライフヒストリーを紡いだ作品である。大学院生のときに、水俣を訪れた著者が、全共闘運動との交差点で自己の「存在の根」を模索していった日記が構成されて、出版されたものである。「本書は、一人の男が学園闘争

と水俣病闘争が交差する地点に立って、両者を見、やがて前者を見切り、後者に加わって去るまでの日記を収める。学園闘争も水俣闘争も、若者がそれに関わる限り、何ほどこアイデンティティへの問い、すなわち自らの存在理由への熱い想いを含まないではない。「1968」年を生きた若者たちのアイデンティティへの問いは、システムによって破壊された共同体に替わる、新しい共同性、共に生きる場への問いに結びついていた。」(栗原、解題6)「岩瀬は「ただ人間として生きようとする人達と結びつくこと」と日記に記す。水俣病患者のように、また、筑豊、被差別部落、三里塚、東北農民、新潟水俣病のように、人間として生きる一人ひとりの存在と響きあって生きること。」(栗原、解題12)のちに再び、触れたい。

他に松本勉・上村好男・中村孝編『水俣病患者とともに 日吉フミコ闘いの記録』(2001年)は分類に困ったが、自叙伝や他者によるライフヒストリー叙述、会議録、対談などによって、立体的に日吉氏という人物が浮かび上がるように構成されていて、興味深い⁽¹³⁾。また、宮本憲一編『水俣レクイエム』岩波書店1994などもある⁽¹⁴⁾。

4. 考察

以上の各作品の事例からどのようなことが言えるだろうか。ここでは3点挙げたい。

まず、1～5のどのような形態にしても調査者あるいは聞き手と、被調査者あるいは語り手の関係性に関する明確な自覚があることである。自叙伝であれば、水俣病と自分との関係性、さらに書物を編むまでの過程が、また他者によるライフヒストリーの編集であれば、そこにはその他者とライフヒストリーの語り手の信頼関係のもとに、両者の関係性と、書物を編むにいたる過程と意図が明瞭に記されている。

緒方氏の著作の序文で石牟礼氏はこう書いている。「水俣病が発生する前の海、いやそのさらに昔々の海へむかって、小さな舟の舳先が頭を振っていた。舳先は髻を結わせた形に作ってあった。正人さんや杉本夫妻のたどった長い

受難の日々を、わたしは想ってはみるが、ただの一日たりとも、体験できないのである。」(序 神話の海へ4) 羽賀氏の先の著書からの一文もそうである。「深い悲しみの瞬間に出会うと、私には聞いて聞いて聞きぬくこと以外なすすべがなくなる。そして、せめてもう少し近くへ、ほんのわずかでもそばに近よればと、痛切に願う。」(羽賀1985はじめに)辻氏のあとがきから「ぼくの耳に緒方の言葉は新鮮に響いた。ぼくが知っている日本の言語生活の中ではめったに出会うことのできない不思議な透明感がそこにはあった。一体それは何に由来するものなのだろう?…ぼくは緒方の「狂い」を理解できるものではない。それについて想像をめぐらすことができるだけだ。」(緒方／辻1996:240-245)

このように、語るべき対象との関係性があらかじめ自覚された上で、聞き手の対象への限らない接近の希求と同時に、対象にたいして完全に理解することの不可能性も自覚されている。もちろん、書き手が研究者ばかりでなく、患者や支援者などの研究に携わらない人などさまざまであるが、人類学において自省の対象となっていたことが、ここではあらかじめ克服されているのではないか。

つぎに言えることは、1の作品がある(多い)ということそのものが意味することである。聞き手がなぜ語り手と出会って、自らのライフヒストリーを表出するか、なにゆえこうした書物を書くにいたったのか、これは通常の書物においても序やあとがきで触れられるところではあるが、これらの作品はそれこそが作品全体の前面に出ている。1でとりあげた土本氏や原田氏で引用した箇所以外にも作品の全体に貫通している。土本氏は「なぜあなたは水俣を撮ったのですか?」という問いが少なくない。あるいは、「なぜ撮りつづけるのか」と。それに答えるのに「私は見たからだ」と、いい、あと言葉をつづけるのに迷う。…実は見たという一言がやはり私にとって決定的であり、一回性のもつ不可逆の出遭いであったことにつきるのである。」(土本1988:295-296)「私たちが生活者のいる世界、つまり患者の棲む漁民集落に入ったとき、私は初めて、子供らの母から、厳しい問詰と非難に立たされた。

…以来、私は水俣に原罪を感じつづけ、それからの全的解放はない。」(土本1988:296-297)「何のために書くのか」という問いかけに答えることは難しい。しかし、私がこの不知火海沿岸で「見てしまったこと」「聞いてしまったこと」の何百分の一でもここで吐き出してしまいたい。それは私自身のために「何故、水俣にこだわりつづけるか」という問いかけの答えをさぐるために…」(原田1989:269)「…治らない患者たちはその時、先生たちは水俣病で何ができるのですか。と問いかけていたのであった。この問いかけが私の医療の出発点(原点)となった。」(原田1995:7)さらに、2に分類したが、羽賀氏の一部を挙げよう。「…水俣病という未曾有の惨劇の中から、不退転の闘いに立ち上がった人々の、今もそしてこれからも逃れることのできない生活の中で闘い続けている人々の、遺産とは何だろう。話を聞いている私達も、必ずいつか死ぬのだ、とはたと思いついて、放っておけばただ消えていってしまう人々の言葉を、文字という姿につなぎとめておきたいと心ばかり逸る。」(羽賀1985はじめに)これは、水俣で調査なり、研究なり、支援なりで訪れた人々が大きな衝撃を受け、自分の存在の次元で、水俣との出会いを捉え直しているからである。いわゆる自己の存在論的格闘をおこなった結果の作品であるといえる。その他の5で触れた岩瀬氏も「水俣病は自分自身を内面から揺り動かし、行動にかりたて、水俣の目をもって日本全国津々浦々を見て回る原動力になった。自分自身の目で見、自分の足で歩いて考えることを教えてくれたのが水俣病であった。」(岩瀬1999:14-15)患者の緒方氏の語りの構成者である辻氏は「聞き書きは一応終わったが、彼との出会いの意味が本当にぼくのうちに生き始めるのはこれからだ。このことを、ぼくはまるで手にとってみるように実感していた。一方、彼との闘いは螺旋を描くように続いていく。それはぼくを深く揺さぶり、励ましていくことだろう。わくわくするような楽しい予感だ。」(緒方/辻1996:238)

最後に、岡本氏の透徹した聞き書きの方法論によって、以下のことを指摘したい。岡本氏の聞き書きは、岡本達明編『近代民衆の記録7 漁民』所収の「天草漁民間書」(1988年)が久場五九郎のペンネームで書かれているもの

と、岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史 1～5』（1989-1990年）がある。とくに、『聞書水俣民衆史』に示されている方法論とは何か。まず、聞書きの目的は、「水俣という一地域を取り、日本の近・現代の生産社会とその中で生きてきた民衆の意味を、深く掘り下げてみようとしたのだ。…本シリーズは、…水俣における「村」「工場」「民衆」の歴史ということになろう。」（岡本1990、5巻：339）であり、この仕事そのものは、「この仕事が終われば全ての原稿を焼いて一本の焼酎のカンをつけ、楽しく飲んでお仕舞いにしようというのが、それまでの二人の暗黙の諒解であった。他人のためではなく、自分のためにやってきた仕事だからである。」（岡本1990、5巻：338）そして、費やした時間は「私たち二人が聞書を始めてから二十年めである。」（岡本1990、5巻：338）

また、「水俣における村と工場と民衆の歴史を調べる作業を完結させるには、更にそれを客観化し相対化することが必要であった。…水俣という地域に対して天草と朝鮮興南を、農民に対しては漁民を、日本人労働者に対しては朝鮮労働者を、対置して調べるというのが私たちの取った方法論である。…ある生産社会は、異質な社会と対比してはじめてその全貌が明らかになる。」というように、二項対立によって、科学的に特徴を際立たせようとする手法である⁽¹⁵⁾。そこで示される視点は、「生産社会の民衆は、多く支配、被支配の関係で論じられてきたが、それだけでは不十分である。支配される民衆、差別される民衆の論理とその世界は分りやすい。支配する側、他者を差別する民衆の論理とその世界はわかりやすい、その全体を見なければ、民衆を論じたことにはならないであろう。」（岡本1990、5巻：341）というように、歴史学という社会史の視点に通じている⁽¹⁶⁾。

「聞書とは、いわば肉体化した個人の経験や考えを聞く営為である。個の体験を集めさえすれば、一つの社会の構造を解明できるなどということはない。しかし文献資料が存在しない以上、聞書だけが問題を調べていく唯一可能な方法であった。」（岡本1990、5巻：342）という自覚のもとで、以下のような方法論に辿り着く。

「まず、多数の人に話を聞き、できるだけ話したいことを自由に話してもらう。聞き書がある量に達すると、自然に全体の輪郭が手足をもって浮かび上がり、その輪郭を自分なりに整理して、デッサンを作る。そののちに、今度はあらためて自分の問題意識をもって、聞くべき人に徹底して聞く。この段階では聞き手と話し手の同化と葛藤が起ってくる。社会科学の命題としてではなく、人間の問題としてとらえていくことの重要性も、経験を積む中で分かってきたことである。感動のない聞き書は面白くない。こうして一次デッサンが深まって二次デッサンが画けたとき、聞くという営為は完了する。それから編集作業に移るが、必要なことは、逆に話者と自分を引き離すということで、話自体の価値を客観化する。こうすることによって、個々の話が本来持っていた意味が現われ、新しい発見も否定もある。こうして、個々の話の取捨選択が可能になる。いままでは集めることが大事だったが、今度は捨てることが大事になる。長い話を全部捨てることも、一行だけ取ることもある。聞き書の編集とは、デッサンを画くことではなく、その選ばれた話を組み立てて家を建てる仕事である。捨てた話に価値がないのではない。その家を建てるのに向かないと判断されただけだ。素材の信憑性の検討もこのとき行なった。数字については、限界もあったができ得る限り文献資料を当たってチェックした。」(岡本1990、5巻：342-343)

岡本氏の聞き書の民族誌は、聞き手が限りなく表現されていないという点において、そして、聞き書のみにおいてその一つの世界を構築しようという点において、人類学者がこれまで試みてきた民族誌と通じている。まず、フィールドワークでの条件である。質量とも圧倒的に膨大であること、水俣弁という言葉の習熟、その五感を使った体系的な理解と分析。すなわち、感動という主観も認識しながら採集した聞き書を客観化していく作業を行うこと。しかしながら、人類学者の民族誌と決定的に異なることは「聞き書を再構成することは、家を建てること」であるという明白な自覚である。何を捨てて、何を取るか、それはどのような家を建てたいかという意図にもとづくものであって、その語りそのものが無価値であるとか価値があるとかいうこ

とではないこと。岡本氏は、民衆、工場、村というキーワードによって、近現代が民衆にとってどういう意味をもっていたのか、ということを理解するための家を立てたかったのである。人類学者において批判されてきたのは、どのような家を立てたいか、そしてその取捨選択が無意識に、無自覚のうちになされてきたことである。そして、五感を使ったフィールド調査があたかも、その世界のすべてを知りえたもの、体系化しうるものとして表出されてきたことである。つまり、建ててきた家が万能の家、全知全能の家というより、世界として、表出されてきたことではないか。この点が、人類学者のこれまでの批判されてきた民族誌との大きな違いであるといえる。

さらに、彼による以下の指摘は人類学者の民族誌の問題にも通じる点である。「一地域の問題を扱う仕事は聞書に限らず、簡単な物差で成否を判断することができる。それは、当該地域に住みあるいは当該工場で働いた人々にとっても発見性があるかどうか、その地域に行ったこともなければ、ましてその町の工場のことなど知りもしない人々にとっても面白いかどうか、という二点である。どちらか一方をパスしただけでは、仕事が成功したとは言えない。地域の内部に居て仕事をする者は、その心象風景に至るまで知り得たとしても、その意味を客観化することは難しい。外部から来て仕事をする者は、意味はつかみやすいが、己の中に内部地図を画くことは困難である。そこで、前者の仕事は沈黙に、後者の仕事は饒舌な作りごとに似やすい。いわば、主観化と客観化が共にできなくては、仕事は成立しないのである。私たちの仕事がどこまでいきついたかは、読者の御批判をあおぐしかない。」(岡本1990、5巻：344) これは、人類学者が逡巡する箇所を的確に言い当てている。外部から一方的に訪問する人類学者は後者になりがちであった。しかし、内部の人にとっても新しい発見が必要となった現在だからこそ、つまり、一方的に調査される側だった社会の人々によって、その民族誌の意味が問われるようになる、調査してきた側は沈黙せざるを得なくなっているのである。

それにしても、岡本氏はなにゆえこれほどの洞察を備えているのか。それは、何よりも彼が人類学者のフィールドワークの質量をはるかに上回ってき

たからだろう。さらに、「ただ一人の大卒として」、第一組合委員長として権力と闘ってきた彼は、いわばサバルタンとしての透徹した認識が表出する位置にいたことに起因するだろう。彼は、その位置において20年にもわたる聞き取り調査を行なったのである。

「私は、「民衆にとって日本の近・現代とは何であったか」を明らかにすることを自分のライフワークとし、このため、明治維新以来の水俣の村と、明治末からのチッソの工場を調べ、五巻の著作にしてきました。その仕事は、敗戦時で終わったまま中断していました。戦後の工場の最大の問題は、何といっても水俣病です。…私にとって本書は第六巻に当たります。あと、「水俣病の村」の仕事が残っています。明日からまた新しい旅へ出発することになります。命がまだ尽きていなければ。」(岡本2001:18)⁽¹⁷⁾この聞き書きと対象理解への気迫は、私自身が自分のフィールド調査を振り返っても心底恥ずかしくなるほどである。

5. おわりに

水俣病事件をととして人類学のフィールドワークと民族誌を問い直すことを本稿の目的とし、水俣と出会った人々によって生み出されたさまざまな作品を見てきた。この水俣の事例だけでなく、その他の公害運動や社会運動の事例であったとしても、このようにフィールドワークと民族誌のあり方を問い直せるかということ、そうとはかぎらないだろう。なぜなら、水俣病事件は、日本の後期資本主義社会として、近代化の転換点にあった出来事だからである。当時の水俣の運動は、公害闘争という意味合いを超えて、あるところまで到達した近代への鋭い問い直しであり、否定の源であった。それは全世界的なさまざまな新しい社会運動ともうねりをともにすることになる。その意味で、多くの人々が存在論的に格闘することを余儀なくさせた大きな歴史の表徴であったのではないか。

鶴見和子は、水俣病事件がもたらした運動について、以下のように考察する。「乙女塚、相思社、反農連は、それぞれ独自の活動のスタイルを持つが、

目標は共通する。…そうしたいみでは、西欧をモデルとした近代化を急速に極度に、おしすすめることから生じた弊害を癒すための、日本全地のさまざまな市民運動および地域主義の動きに連動する。しかし同時に、水俣の運動がもつ特殊性がある。それは、動機づけの深さである。利潤追求を究極の目的とした企業と、そのために企業が駆使した近代技術によって、身体と生活とを破壊されつくした人間が、自力と合力とによって、自らを滅したものと異なる生産と生活の様式を生み出そうとする志の深さである。その動機づけの深さにおいて、水俣病患者による水俣再生への努力は、長崎、広島の被爆者の反核平和運動に匹敵し、共通するとわたしは考える。」(鶴見和子1983：231-232)

ここに示されているように、自然、身体、科学、宗教、生産、消費など多くのあり方を根本的に問い直し、変革へと促す水俣病事件は、複合社会における現代的紛争の一つなのである⁽¹⁸⁾。

私がライフヒストリー研究を文化人類学的アプローチとして評価したいのは、この歴史の転換点としての表徴を理解するのに、社会、構造、体系といったマクロ的視点だけでは限界があると考えたからである。つまり、マクロな近代という物語によって、個々の人々の声や生の彩りを取り戻す方法は、個々の生と存在論的に格闘しつつ理解を深めていくこの方法がふさわしいと思われるのである。

「『システムの中の水俣病』というものにもう我慢しきれんようになった…運動の中で我々は責任を追求してきた。しかし、この40年の間にはっきりしたのは、チッソや県や国には「しくみ」の中での回答しかできず、本質的な責任がとれないということ。」(緒方1996：165)あるいは、「確かに、責任を問う側から問われる側に近づくのと、その逆とは違うだろう。問う場合には集団から外れて個人としてでもできるけど、問われる場合には個になりきれんところがある。俺がひとりでチッソの前に座り込みをしたとき、向こうが困ったというのはそこのところですよ。でも、個と個にならない限り、本当の接点は生まれません。」(緒方1996：170)「個と個にならないと接点は生ま

れません」という緒方氏のことばは、近代という大きな物語に圧殺されかかった人々を個として解放して、その上で個々の生をどう形作っていくか、理解しあっていくかということばであろう。人類学、人間学というこのことばをかみしめると、人間そのものを復権していくためには、日本の近代という大きな物語と格闘してきた個々の多様な生の形を、自分の存在論的次元で理解し、それを共同作業によって記述していくという方法がもっと評価されてもよいのではないか。ライフヒストリー研究でその作品を紡ぎ出すとき、そこから形作られる聞き手、語り手、読者の出会いは、個人的で存在論的次元での出会いであり、自己変革の契機でもある。「この本の中でその人の存在そのものと出会うことは、水俣展で固有名をもつ遺影と出会う経験に似ている。…固有名をもつ遺影の前に私が立つ。私が固有名をもつひとりを見ているはずなのに、私が固有名をもつ者として遺影に見られている。遺影のまなざしに照らされて、私も個として、素顔でひとり立っていることに気がつく。私が人間の素顔で立つことができ、はじめて素顔の他者と出会うことができる。水俣病問題のあらゆる場面に人間の素顔を見取ること。私たちは今まで加害者についても被害者についても、また私自身についても、人間的現実を問わないできたのではなかったか。」(栗原2000：22-23)「ひとりの証言を読むとき、なぜ私は遺影の前に素顔で立つことに近い感覚をもつのだろうか。それは、証言者が「水俣病の患者さん」一般としてではなく、固有名をもって自らの全存在を賭けて生活史を語り、現在の自分を語っているからである。ページをめくりながらゆっくりと存在の訪れを受け入れることは折りということにとっても近い。」「水俣病問題の中に素顔の人間を見届けたいと私が考えるのは、私自身が曇りなく人間的な判断が下せる人間として生きたいと願うからだ。誰もが今日、組織の中で何らかの決定に遭遇しながら生きている。その決定が私の生命への感受性に抵触するもので、私も加害者になるかもしれないとしたら、私はどうするか。私がチッソの幹部だったら、チッソと異なる決定をしていただろうか。」(栗原2000：23)『証言 水俣病』を紡いだ栗原氏の自身への存在への問いが見い出される。

また、たとえば、「市民」「患者」「チッソ」「行政」といったような呼称は、勝手に呼称にすぎないのに、これが実体化して語られることが多かった。この実体化が、分類された相互の距離を絶対的なものにして、現在行われている「もやい直し」を困難なものにしていた可能性があるのではないか。ライフヒストリーの功績は、そうした分類された枠組みから多様な個人を解き放ち、多様な生を再び叙述することにもある。現実には、患者であって、チッソに勤めていて、もちろん市民である。また、個々の多様な人生において水俣病と格闘して生きることを余儀なくされてはいても、それは一生涯にわたる悲愴感や絶望感のみで彩られるものではない。これは、人々の日常を振り返ってみれば、ごく当たり前のことであるが、それを対象として認識しようとするときに、そうしたごく当たり前のことを忘れ、仮に使用される分析枠組を固定化してしまうのである。たとえば、患者について一枚岩的に憐憫の情をもって語ること、あるいは胎児性患者をたとえば「異状人間」として言説において区別することこそ、逆に一枚岩的な排除を生み出す根幹となる可能性がある⁽¹⁹⁾。こうした研究者にかぎらない多くの人々の手っ取り早い「理解」を固定させる枠組から、ライフヒストリー調査は、多様で多彩な生の彩りを回復させていく。それは調査者、編集者、読み手、おそらくは語り手自身も自らのライフヒストリーをつむぎだし、それを味わうことによって、上述の画一的な理解から我々を解き放つ効果がある。

原田氏の「水俣病は鏡である」という冒頭に掲げたことばの意味は深い。水俣病事件という大きな歴史の転換点としての表徴に遭遇したことによって、少なからず自ら存在論的に格闘することを余儀なくされる。そこに、自分が照射されて、自分自身の存在について問い直される。これまで、関わりあう「私」は客観性の担保にとって不要なので、隠蔽されがちであったのに対し、水俣においては対象と向き合い、自分と対象との関係性について深く考察することなしには、水俣について語りを聞くこと、語ることも困難となる。これが、人類学で問題となっていた対象との関係性について、無自覚で

あることからごく自然に免れることを許すのである。いいかえれば、研究者その他、水俣病とかかわり合うには、存在論的にセルフが格闘しないではいられないこと、研究者としてのあり方、何を対象として研究するのか、どういう姿勢で、何のために研究するのかということが問いただされ、映し出される意味で「鏡」なのである。

水俣学とは、さまざまな研究分野の人々がそれと向き合って、存在論的にセルフを投げ出して、格闘し、「鏡」に映し合うことによって、共通の議論の土台をつくりあげていくことであろう。科学が細分化され、分析枠組みが個別化され、評価も個別化されて、何のための学問か、何を対象としているのかが自覚できなくなった現代の多くの研究者（専門家）たちにとって、水俣病をとおすことによって、上述のことが自覚化され、問い直されていく⁽²⁰⁾。そして、新しい形の学問のあり方が構築されていくのではないか。対象をとおして、自らが格闘し、分析や研究の意味そのものを問い直していくこと。その意味において、水俣学はどのような分野の人にも開かれており、通常は隔絶して、共通の言語をもたない諸分野の共通言語（共通の理解の土壌）をお互いに構築していく営みによって形成されていくものだと思われる⁽²¹⁾。

この水俣という強力な磁場をめぐる、その時代時代に応じて、そしてそれぞれの立場に応じて、さまざまな形で多くの人々が水俣病に対峙してきた。水俣病事件との出会いの衝撃が、50年という歳月を経た今、薄れているのは事実である。それは、どのような社会問題、事件の場合でも同様であろう。私たちが歴史の一時点、空間の一点の存在にすぎないことを考えれば、それは当然である。時空に制限された相対的な存在である研究者が捉える多くのさまざまな相対的な人々。そこからある種の「人間学」として人間に特有の普遍性（絶対性）を見い出していくことが、おそらくそもそもの人類学であったはずである。今、私たちが自らの感官を駆使して捉える水俣は当時、多くの人々が捉えた水俣とははっきり異なるであろう。その衝撃が調査者と対象との関係性を決定し、その対象に鬼気迫る気迫で対峙してきた人々がものしてきた記述（表現作品、聞き書き）とくらべて、現在の私がものするのであ

う記述にその気迫が薄らいでいるのは当然といえば当然である。しかしながら、このいわゆる原初における出会いの衝撃が少ないからといって、劣った民族誌しか書けないというわけでもないであろうし、劣った表現しかし得ないわけではない。つまり、原初における出会いから時代が変化したとはいえ、事件当時と今においてもそのそれぞれの出会いの一回性という意味においては同じである。だとすれば、出会ったその位置から表現をしていくこと以外になすことはできないであろう。その一回きりの出会いによって、対象を描き、自らのセルフと格闘しつつ、記述する。そして、それを読んだ読者もその表現されたものによって、自己の変革を迫られる。この意味に限定すれば、文学作品やジャーナリストのものした作品と人類学者のものがいかに異なるかということが当然ながら問題になる。しかし、その聞き書きにおいて「他者理解」の方法論を模索していくことそのものが、人類学者のアイデンティティと考えられる。構想されている水俣学においては、そうした一回性の出会いの意味を吟味し、それを各分野で対話できるようにしていくこと、さらに、のちの人々の一回性の出会いの場を用意していくことが、これから求められているのではないか。

注

- (1) たしかに、水俣という地の文化的宗教的土壌を研究することも興味深い。たとえば、いくつか聞き書きもあるが、漁民の世界観を探ることなどである。また、近年では環境創造事業とあいつつエコ・ツーリズムなど、水俣の負の遺産を世界への発信する戦略は、観光人類学の対象として興味深い。このようにテーマは多々考えられるが、私自身の以下に述べる関心から、方法についての模索があった。
- (2) リオタール『ポストモダンの条件』（1986年）、日本に当てはめて栗原彬のことばでいうと、「生産力ナショナリズム」の時代でもある。「水俣病は社会病であると同時に、政治病でもある。日本ばかりか世界的な広がりをもつ近代化を推進する政治の圏内で、政治システムは、水俣病を

生み出す政治、水俣病を拡大・深化する政治、そして「人を人と思わない」ジェノサイド（絶滅、皆殺し）の政治を展開した。…水俣病を導いたこの一つのできごとは、近代世界を席卷した生産力ナショナリズムの政治抜きには考えられない。生産力ナショナリズムとは、国家や会社などのシステム全体の生産力を増大すれば、人は豊かになり、幸福になるというイデオロギーであり、政策でもある。」（栗原2000：11-12）

- (3) 「新しい社会運動」は都市運動、エコロジー運動、反権威・反制度運動、フェミニズム運動、反人種主義、マイノリティ運動などとして出現してきた。これらは、19世紀以来の社会運動が「階級闘争」という旧時代のマルクス主義理論で説明されてきた限界を示している。この新しい社会運動の分析をめぐって、アルチュセールやグラムシの再評価によるマルクス主義理論の組み直しがさまざまに行われている。そして、この現代的紛争の理解が、社会科学の主要な課題と認識される中で、イタリアの社会学者メルッチの議論は興味深い。

資本主義の極まった形で現われた新しい紛争の形態として、水俣病闘争や同時代の全共闘をとらえるならば、これらは「複合社会」である現代のいかなる変化を示しているのか。「今日、複合社会では、人間の経験の根本的側面が大きく変化しようとしており、新しい権力やリスクの成立とともに新たな欲求が誕生している。これらすべてが時間や空間、人の誕生と死、健康と病気、そして個人の生や集団の生といった人間の経験に影響を及ぼしているものであり、そのことを私たちは知る必要がある。」（メルッチ1999：26）現代の紛争では意味が複合的に織り合わさっており、紛争を最終的に解決することがいかに難しいかは、現実を見れば明らかである。水俣病事件はなにゆえ50年経った今も諸問題を残しているのか。これは、日本社会のシステムの問題や資本主義の構造という視点のみならず、現代的紛争として捉えれば、メルッチの上記の引用にあるような視点から、多角的な理解ができるのではないか。本稿の例（土本1988）にもあるように、水俣病闘争そのもののまでが、過激派の運動と

みなされていた事実があり、全共闘や三里塚などの運動とならぶ形で反公害闘争の拠点として水俣があったとすれば、後述するが、水俣病事件は歴史的転換点としての表徴でもあったといえる。これら一連の社会運動に連関があったことは、NHKの『そのとき日本は』（1995年）にもとりあげられていることや、後述する岩瀬氏の「もし、あの時期に、全共闘運動がなかったならば、恐らく私にとって水俣との出会いは無かつたであろうと、確信をもって言える。」（岩瀬1999：14-15）という述懐からもわかる。その意味で、水俣病事件を歴史的転換点の表徴、新しい社会運動の一つとして分析することは、ますます複合社会化が進む現代社会を理解する上で有益なことだろう。本稿では、ライフヒストリー研究法の評価に焦点をあてているため、メルッチらの理論的枠組から新しい社会運動として水俣病事件を捉えることはできなかったが、今後の課題にしたい。

- (4) こうした問いは、色川大吉らによる「不知火会総合調査団」による報告書（色川大吉編『水俣の啓示 上下』筑摩書房1983、新編は1995年）にも触れられている。宗教社会学や社会学、民俗学、歴史学、政治学、生物学、医学、経済学など多岐にわたる専門家集団がそれぞれの分野から水俣をアプローチする際には、方法論上の問いや逡巡があった。
- (5) 松田1991：40-43参照。
- (6) Marcus, G.E. & Fisher, M.J 1986 & Clifford, J. & Marcus, G.E. (eds.) 1986参照。その後も、主体と対象（我々／彼ら）という二分法そのものを乗り越えるために、さまざまな人類学者によって実験的な試みがなされてきた。本稿でのちに取り上げるクラパンザーノの著作もその一つである。他に、モノログではなくダイアログやポリログとして記述するなど、なるべく編集者の権威を見えなくする方法をとっている。
- (7) 川又1996参照。社会生活史とは、歴史学において見直されている社会史とほぼ同義であるという。米山も訳著（1993）において、ライフヒストリーとカタカナで記している。社会学でもライフヒストリーの活用は

るように、その他多くの分野で、ライフヒストリー調査は行なわれてきた。たとえば、臨床心理学や精神分析学、パーソナリティ心理学、文学研究、哲学研究、歴史(とくに民衆史、近年のニューヒストリーなど)、社会学、民俗学など個人の生、生活への関心はいずれの学問においてももたれてきた。(ラングネス22他)。しかしながら、社会学、人類学において方法論としてマジョリティにはなり得ていない。社会史については、注(6)を参照。

- (8) アルチュセールのイデオロギー概念の中心的なテーゼの一つに「イデオロギーは諸個人が彼等の存在の現実的諸条件に対してもつ想像上の表象である」(アルチュセール1993: 66)とあるように、アルチュセールのそれは現実を歪曲するという狭義のイデオロギー概念とは異なる意味で、マルクス主義理論の再構築とポストモダン思想家らに再評価されている。私がここで用いているイデオロギー効果とは、このアルチュセールのテーゼに従っている。「言説、語り discours, discourse」がすべてイデオロギー効果をもつという意味は、すべての言説が個々の「生」を理解する手がかりになることを意図している。これは、フーコーの追従者がすべてのディスクールに権力を読み取ることで、「権力」の概念そのものが無効になることを批判するイーグルトン(イギリスのマルクス主義の文芸批評家)の指摘も理解した上である(イーグルトン1996)。というのは、個々の生を理解する上で、何を中心的な言説で、何を周縁的な言説とするかの明瞭な指標がまだ見いだせないからである。

- (9) つまり、個人の生活史に焦点をあてても、全体の社会がいかに把握しうるのかというところで、限界を指摘されてきたのである。これは、フランス社会学のデュルケームの社会学主義、さらに、その社会概念を受け継ぐラドクリフ・ブラウンなどの「社会構造」概念の隆盛が物語っている。デュルケームの社会学は、個々人の心理を追究する心理学主義を徹底的に排し、個々人を超えた集団、社会という概念を重視した。ラドクリフ・ブラウンはこのデュルケームの社会というある種、実体化され

た概念を受け継ぎ、そこから生物学をモデルとした機能主義によって、社会を理解しようとした(Radcliffe-Brown, A.R.1952)。これ以降、この流れを組んだ人類学は、もっぱら社会、構造、体系といった個々人を超えた何らかのものを実体化し、あるいは実体化を批判しながらも、それに関心を注いできたのである。

- (10) 米山(1993:219)参照。さらに、松田(1995)によって、手際よくまとめられた成果が参考になる。人類学的方法論全体にたいする自省の動きは、こうした個々人の行為が部族や民族といったタームによっておとしめられていたことへの見直しであり、根本的に調査者の自己意識を問うことであった。その中でライフヒストリーは、初期から個人の生を対象として発展してきた調査方法として注目されている。たとえば、著明なオスカー・ルイスの『サンチェスの子どもたち』(1961)や『五つの家族』(1959)は普通のメキシコ人の日常生活を映し出している。そこで用いられている「貧困文化」という概念は議論をもたらししたが、民族誌あるいは文学作品としても評価が高い。
- (11) クラパンザーノ1980(1991)参照。「フィールドワークは、時間の流れの次元における、発見と自己発見の不断の過程として理解されなければならない」(クラパンザーノ1991:236)のことばにあるように、フィールドで発見と自己発見を繰り返し、そして民族誌を書くことによって、自己変革の経験になるのである。彼の民族誌は「実験的民族誌」として評価が分かれている。
- (12) 栗原によると、水俣病の世界の内側からの肉声の証言は、これまでいくつか(石牟礼道子の『苦海浄土』1972年、最首悟らの聞き書(最首悟編『出月私記—浜元二徳語り』1989年、水俣病患者連合編『魚湧く海』1998年など)を除いては聞こえてこなかったとある(栗原2000)。たしかに、患者自身による証言、患者をめぐる支援者や専門家たちによるその証言の採集(ライフヒストリー調査、聞き書き)は、近年になるまで稀少であった。私がここで扱っている作品は、上記の聞き書きのみならず、

水俣病事件に出会った聞き手のライフヒストリーも交えたもの、その他も含めて広義に捉えている。以下に年代別に記している文献は、もちろんごく一部であるが、私が概観しえたものである。

60年代：

石牟礼道子『苦海浄土』 1969

70年代：

三島昭男『哭け、不知火の海』 1977

80年代：

角田豊子「天草の女—嵐口の一老女の話」色川大吉編『水俣の啓示 —不知火海総合調査報告（下）』 1983

藤野幸平『水俣の灯』 1983

羽賀しげ子『水俣＝語りつぎ 1 不知火記 海辺の聞き書』 1985

鬼塚 巖『おるが水俣』 1986

土本典明『水俣＝語りつぎ 2 水俣映画遍歴 記録なければ事実なし』 1988

丸山和彦・板井八重子編著『女たちのミナマタ 証言 愛のかがやき、生命の叫び』 1988

岡本達明「天草漁民聞書」『近代民衆の記録 7 漁民』 1988

最首悟編『出月私記-浜元二徳語り』 1989

原田正純『水俣＝語りつぎ 4 水俣・もう一つのカルテ』 1989

岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史 1～5』 1989-1990

90年代：

藤本寿子（著）、芥川 仁（その他）『水俣海の樹』 1992

宮本憲一編『水俣レクイエム』 1994

協力／環境創造みなまた委員会『みなまた 対立からもやい直しへ』 1995

環境創造みなまた実行委員会編『再生する水俣』 1995

緒方正人語り／辻 信一構成『常世の舟を漕ぎて：水俣病私史』 1996

木野 茂・山中由紀『水俣まんだら 聞書・不知火海を離れた水俣病患者』 1996

熊本県民医連の水俣病闘争の歴史編集委員会『水俣病 ともに生きた人々』 1997

徳臣晴比古『水俣病日記 水俣の謎解きに携わった研究者の記録から』 1998

水俣病患者連合編『魚湧く海』 1998

岩瀬政夫『水俣巡礼 青春グラフィティ'70～72』 1999

2000年代：

御手洗鯛右『命限りある日まで』 2000

栗原 彬編『証言 水俣病』 2000

木野 茂・山中由紀『新・水俣まんだら チッソ水俣病関西訴訟の患者たち』 2001

- (13) この作品は、市会議員の日吉氏とずっと行動をとともにしてきた松本氏と、患者家族である上村氏、朝日新聞の記者であった中村氏によって作られた。章ごとに議事録とエピソードが載せられ、それによって日吉氏の行動の記録が編年体式によってわかりやすくつづられている。臨場感あふれている。そのあとに、日吉氏の生い立ちが、熊本女性史編纂委員会によって綴られたものと、日吉氏本人によって綴られたものの二つが掲載されている。最後に松本氏と日吉氏の対談で締めくくられている。こうしてわかるとおり、日吉氏の行動の記録とライフヒストリーがあらゆる角度から記載された記録（議事録）とエピソードなどによってまとめられている点が、面白い。この記録が出版されたのは、松本氏の「書き残さねばならない」という強い意志によるものであると見受けられる。
- (14) この作品は、津奈木町に生まれ育ち、水俣病に冒されて29才で生涯を閉じた女性の歌集を中心に作られたものである。「この本は佐々木つた子

さんの歌を通しての水俣病患者へのレクイエムであり、同時に、政府への解決を求める被害者と私たち支援者の叫びでもあります」。(宮本 1994 : 9) 宮本氏は学際的な水俣調査団をつくり、社会科学分野では最初の調査と研究を行い、その成果として『公害都市の再生・水俣』筑摩書房1977がある。

- (15) こうした二項対立の視点は、岡本氏の「天草漁民聞書」(1989年)にも貫通している。漁民と農民という対立から近代社会の諸矛盾を照射する視点は鋭い。

「農・漁の本質の違い、疾病・貧困によって、漁民に対する近代の不知火海沿岸の民衆の意識が自律され、かくして規定された漁民を出発点として水俣病が始り、水俣病という疾病、水俣病による貧困によって、疎外が重層化し凝縮していったのである。これが「心の水俣病」の根であり、水俣病は民衆の意識の世界において、近代が凝縮した現代として出現したということができる。」「もし、水俣の此岸の民が、彼岸の民である漁民の虐殺を正しく受けとめることができれば、被害の拡大を防ぎ得たかもしれない。…だが、同じ有機水銀におかされてすら、此岸と彼岸の壁が厳存していることは、先に引用した農民の話によって明らかである。あたかも、民衆世界の暗黒をどこまでも貫く絶壁であるかのよう――」(岡本1989 : 30)懸念されるのは、この対立項があまりに明瞭に固定的に描かれているため、聞書き構成の際にこの対立の構図以外の語りを落としてしまったのではとの危惧を抱く。これは、彼自身の方法論にもあるように、どんなことを明らかにしたいかという意図をもっているために、捨象される部分があって然るべきである。ただ、その固定されたように捉えうる構図が、氏の今後の聞書きの著作によっていかに変化していくのか期待されるところである。

- (16) ここでいう社会史の視点とは、政治史や事件史に偏っていた古い歴史学を批判して、人間の歴史全体を捉えようとする「全体史」の視点である。これらは、リュシアン・フェーブルやマルク・ブロックらのフラン

スのアナール学派(雑誌『アナール』1929年創刊)によって提起された。人間活動のあらゆるものに関心を持ち、支配者側のみならず、民衆側からの歴史を次々に照射していった。Perter Burke (eds.), 2001 *New perspective on Historical Writing* (2nd ed.) Plity Press (ピーター・バーグ『ニューヒストリーの現在 歴史叙述の新しい展望』谷川稔他訳人文書院1996) が手際よくまとめられている。また、ヨーロッパ各国での社会史の進展は、竹岡敬温・川北稔『社会史への途』(有斐閣出版1996年)に詳しい。

- (17) このことばは、先頃西村肇と共著で上梓した『水俣病の科学』(2001年)のあとがきにある。この著作は、なにゆえ水俣病という大惨事が起こったのか、原因と連鎖の関係が科学的レベルではまったく謎に包まれたままであったことを、化学工学者の西村氏とともに解明した著書である。「私は、人間を人間と思わないチツソのやり方に直面して、どうしても企業側に立つことはできず、たった一人の大卒として水俣工場の「第一組合」に残り、組合員とともに水俣病第一次訴訟の患者家族と共闘しました。…私は、チツソに籍のある一人の人間として、「工場の仕組み」をはっきり解明してほしいという患者家族の当然の願いに応える義務があると思いました。」(岡本2001: 325-326)そして、1973年から工場の操業データの資料蒐集をはじめた。その後に1989年、「水俣病現地研究会」をつくり、分析化学者の赤木洋勝氏(国立水俣病研究センター)、西村氏(東大)とチームを組み、解明に至る。心に決めた日から27年の歳月という。「一人の人間として、ようやく患者家族への責務が果たせたのです。」(岡本2001: 327)ここでも感じられる気迫が、一連の膨大な聞き書きにいたるフィールドワークを可能にしたのだろう。

- (18) 注(3)参照。

- (19) この「異状人間」ということばは、市井氏の論文中(市井1983)にある。これは同メンバーらによって批判され、代表として最首氏が反対論文を掲載している(最首1983)。2002年1月13-14日に熊本学園大学で開

催された「第7回水俣病事件研究会」において龍谷大学の丸山徳次氏が「市井—最首の論争」再読—「水俣学」構築のために」というタイトルで口答発表された指摘にあるが、他者の苦痛を私が「理解」することの危険性をあらわしている。他者の苦痛を外部から規定できると思ったからこそ、市井氏のように、患者を一様に悲惨で、絶望的で、「地獄絵図」を生きる人にとらえ、胎児性患者に「異状人間」という名称を与えるのである。この指摘は、人類学が常に問題にしてきた「他者理解」の問題と通じている。

- (20) たとえば、色川調査団のメンバーである菊地氏はチッソ労組の問題をとりあげたが、「水俣を訪れてみての感慨は、到底、一口ではいえない。…この衝撃は、学問とは何か、を根底から問いかけてきた。「進歩」とは何か、という漠たる、しかも分厚い壁をたちまち貫通して、専門の穴に閉じこもろうとしていた私を追い詰め、研究者の姿勢を問い詰めてきた」（色川1983：17-18による引用）こうした菊地は「水俣は学問の対象ではない。自分の学問にとっては不要である。そこでは理論化などより聞き書きシリーズのようなものこそ重要であると思う。患者さんの苦しみや内面世界は、論文とは別の形で表現するしかない。そしてそれは必ずや残る仕事になろう。」（色川1983：30-31による引用）と述べている。これは、従来の社会科学の枠組で水俣を捉えることの困難さを指摘するとともに、聞き書きの重要性について洞察している点が興味深い。
- (21) ここで述べている構想は、注(19)で触れた丸山徳次氏の口答発表に示唆を受けている。

参考文献

- 新井豊美 1986 『苦海浄土の世界』れんが書房新社
 アルチュセール、R.「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」（柳内隆訳）
 『アルチュセールの＜イデオロギー＞論』三交社 1993 （Althusser, R.
 1970 “Idéologie et appareils idéologiques d'État”, La Pensée）

- Burke, P. (eds.), 2001 *New perspective on Historical Writing*, (2nd ed.) Plity Press (ピーター・バーグ『ニューヒストリーの現在 歴史叙述の新しい展望』谷川稔他訳 人文書院 1996)
- Clifford, J. and Marcus, G.E. (eds.) 1986 *Writing Culture*, University of California Press: Berkerley, LosAngels, London (クリフォード、J. マーカス、J.編 1996 『文化を書く』(春日直樹他訳) 紀伊国屋書店)
- クラパンザーノ、V. 1991 『精霊と結婚した男—モロッコ人トゥハーミの肖像』紀伊国屋書店 (大塚和夫・渡辺重行訳) (Crapanzano, V. 1980 *TUHAMI Portrait of a Moroccan*, University of Chicago Press.)
- イーグルトン、T. 1996 『イデオロギーとは何か』大橋洋一訳 平凡社 (Eagleton, T. 1991 *Ideology*, Verso.)
- 藤野幸平 1983 『水俣の灯』大月書店
- 藤本寿子(著)、芥川 仁(その他) 1992 『水俣海の樹』海鳥ブックス<12>
- 羽賀しげ子 1985 『水俣＝語りつぎ1 不知火記 海辺の聞き書』新曜社
- 原田正純 1989 『水俣＝語りつぎ4 水俣・もう一つのカルテ』新曜社
- 原田正純 1989 『水俣が映す世界』日本評論社
- 原田正純 1995 『裁かれるのは誰か』世織書房
- 市井三郎 1983 「哲学的省察・公害と文明の逆説—水俣の経験に照らして」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告(上)』筑摩書房
- 色川大吉 1983 「総論」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告(上)』筑摩書房 1983
- 石牟礼道子 1972 『苦海浄土—わが水俣病』講談社文庫
- 岩瀬政夫 1999 『水俣巡礼 青春グラフィティ'70〜72』現代書館
- 川又俊則 1996 「ライフヒストリー研究の断層—特に方法論に関して—」『常民文化』第19号成城大学常民文化研究会
- 協力／環境創造みなまた委員会 1995 『みなまた 対立からもうい直しへ』
- 環境創造みなまた実行委員会編 1995 『再生する水俣』葦書房

- 菊地昌典 1983 「チッソ労働組合と水俣病」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告（下）』筑摩書房
- 熊本県民医連の水俣病闘争の歴史編集委員会 1997 『水俣病 とともに生きた人々』大月書店
- 木野 茂・山中由紀 1996 『水俣まんだら 聞書・不知火海を離れた水俣病患者』るな書房
- 木野 茂・山中由紀 2001 『新・水俣まんだら チッソ水俣病関西訴訟の患者たち』緑風出版
- 栗原 彬編 2000 『証言 水俣病』岩波新書
- ラングネス、L.L.、フランク、G. 1993 『ライフヒストリー入門 伝記への人類学的アプローチ』（米山俊直、小林多寿子訳）ミネルヴァ書房 (Langness, L. L., Frank, G. 1981 *Lives: An Anthropological Approach to Biography*, Chandler & Sharp Publishers, Inc.: California)
- ルイス、O. 1969 『サンチェスの子どもたち』（上島建吉訳）みすず書房
- ルイス、O. 1970 『貧困の文化—五つの家族』（高山智博訳）新潮社
- Malinowski, B., 1984 [1922] *Argonauts of Western Pacific*, Waveland Press. (マリノフスキー 1986 「西太平洋の遠洋航海者」『世界の名著 71 マリノフスキー レヴィ=ストロース』（寺田和夫・増田義郎訳）中央公論社)
- Marcus, G.E. & Fisher, M.J. *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental moment in the Human Sciences*, The University of Chicago Press: Chicago and London (マーカス、G.E., フィッシャー、M.J. 1989 『文化批判としての人類学』（永淵康之訳）紀伊国屋書店)
- 丸山和彦・板井八重子編著 1988 『女たちのミナマタ 証言 愛のかがやき、生命の叫び』新日本出版社
- 松田素二 1991 「方法としてのフィールドワーク」米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社
- 松田素二 1995 「人類学における個人、自己、人生」『現代人類学を学ぶ

人のために』世界思想社

メルッチ、A. (山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳) 『現在に生きる遊牧民
—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店 1999 (Melucci, A.
1989 *Nomades of the Present- Social Movements and Individual
Needs in Contemporary Society*, The Random House Century Group:
London)

水俣病患者連合編 1998 『魚湧く海』葦書房

御手洗鯛右 2000 『命限りあるまで』葦書房

宮本憲一編 1994 『水俣レクイエム』岩波書店

NHK 取材班 1995 『NHK スペシャル 戦後50年そのとき日本は一チッ
ソ・水俣工場技術者たちの告白、東大全共闘 26年後の証言』第3巻
NHK 出版

三島昭男 1977 『哭け、不知火の海』三一書房

宗像 巖 1983 「水俣の内的世界の構造と変容—茂道漁村への水俣病襲
来の記録を中心として」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報
告(上)』筑摩書房

岡本達明 1988 「天草漁民聞書」『近代民衆の記録7 漁民』新人物往来
社

岡本達明・松崎次夫編 1989-1990 『聞書水俣民衆史1～5』草風館(5
巻1990)

岡本達明・西村 肇 2001 『水俣病の科学』日本評論社

緒方正人語り／辻 信一構成 1996 『常世の舟を漕ぎて：水俣病私史』世
織書房

鬼塚 巖 1986 『おるが水俣』現代書館

Radcliffe-Brown, A.R. 1952 *Structure and Function in Primitive
Society*, The Free Press: New York (ラドクリフ・ブラウン 1975 『未
開社会の構造と機能』(青柳まちこ訳) 新泉社)

リオタール 1986 『ポストモダンの条件』小林康夫訳 星雲社

- 最首 悟 1983 「市井論文への反論」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告（上）』筑摩書房
- 最首 悟編 1989 『出月私記—浜元二徳語り』新曜社
- 菅原和孝 1991 「対象としての人間社会」米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社
- 竹岡敬温・川北 稔 1996 『社会史への途』有斐閣出版
- 徳臣晴比古 1998 『水俣病日記 水俣の謎解きに携わった研究者の記録から』熊本日日新聞情報文化センター
- 土本典明 1988 『水俣＝語りつぎ2 水俣映画遍歴 記録なければ事実なし』新曜社
- 角田豊子 1983 「天草の女—嵐口の一老女の話」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告（下）』筑摩書房
- 鶴田和子 1983 「多発部落の構造変化と人間群像—自然破壊から内発的発展へ」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告（上）』筑摩書房
- 米山俊直 1993 「あとがき」『ライフヒストリー入門 伝記への人類学的アプローチ』（米山俊直、小林多寿子訳）ミネルヴァ書房
- 米山俊直 1997（1991）「文化人類学を学ぶということ」米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社